

中国怪奇小説集

録異記

岡本綺堂

青空文庫

第六の男は語る。

「わたくしの役割は五代という事になっています。昔から五代乱離といひまして、なにしろ僅か五十四年のあいだに、梁、唐、晋、漢、周と、国朝が五たびも変つたような混乱時代でありますので、文芸方面は頗る振わなかつたようです。しかしまた一方には、五代乱離といえどもみな国史ありといわれていまして、皆それぞれ国史を残している位ですから、文章まったく地に墜おちたというのではありません。したがって、国史以外にも相当の著述があります。

さてそのなかで、今夜の御注文に応じるには何がよかろうかと

思案しました末に、まずこの『録異記』をえらむことにしました。作者は蜀しよくの杜光庭とこうていであります。杜光庭は方士ほうしで、学者で、唐の末から五代に流れ込み、蜀王しよくの昶しょうに親任された人物です。申すまでもなく、この時代の蜀は正統ではありません、乱世に乗じて自立したものですから、三国時代の蜀と区別するために、歴史家は偽蜀などと呼んでいます。その偽蜀に仕えていたので、杜光庭の評判はあまり好くありません。その偽蜀に仕えていたので、杜光庭の評判はあまり好くありません。単に作物さくぶつとして見る時は、この『録異記』などは五代ちゆうでも屈指の作として知られています。彼はこのほかに『神仙感遇伝』『集仙録』などの著作があります。これから紹介いたしますのは、『録異記』八巻の一部と御承知ください」

異蛇

劍利門けんりもんに蛇がいる。長さは三尺で、その大きいのは甕かめのごとく、小さいのも柱の如く、かしらは兎、からだは蛇で、うなじの下が白い。かれが人を害せんとする時は、山の上からくるくと廻転しながら落ちて来て、往来の人を噛むのである。そうして、人の腋の下を啖くい破くってその穴から生血を吸う。この蛇の名を板は鼻んびといい、常に穴のなかにひそんで、その鼻を微かにあらわしている。鳴く声は牛の吼えるように数里の遠きにきこえ、大地も為に震動する。住民が冬期に田を焼く時、あるいは誤まって彼を焼

き殺すことがあるが、他の蛇に比して脂が多いのみである。

乾符^{けんぷ}年中のことである。神^{しん}仙^{せん}駅に巨きい蛇が出た。黒色で、

身のたけは三十余丈、それにしたがう小蛇の太さは椽^{たるき}のごとく、

柱のごとく、あるいは十石^{こく}入り又は五石入りの甕^{かめ}のごときもの、

およそ幾百匹、東から西へむかつて隊を組んで行く。朝の辰^{たつ}どき

(午前七時—九時)に初めてその前列を見て、夕の西^{とり}どき(午後

五時—七時)にいたる頃、その全部がようやく行き尽くしたので

あつて、その長さ実に幾里であるか判らない。その隊列が終らん

とするところに、一人の小児が紅い旗を持ち、蛇の尾の上に立つ

て踊りつ舞いつ行き過ぎた。この年、山南の節度使の陽^{よう}守^{しゅ}亮^{りやう}

が敗滅した。

会稽山かいけいざんの下に雞冠蛇けいこんだというものが棲んでいる。かしらには雄お雞んどりのような雞冠とさかがあつて、長さ一尺あまり、胴まわり五、六寸。これに撃たれた者はかならず死ぬのである。

爆身蛇ぼくしんだというのがある。灰色で、長さ一、二尺、人の路ゆく声を聞けば、林の中から飛び出して来て、あたかも枯枝が横に飛ぶように人を撃つ。撃たれた者はみな助からない。

黄願蛇おうがんだは長さ一、二尺、黄金のような色で、石のひだのうちほにひそんでいる。雨が降る前には牛のように吼える。これも人を撃つて殺すもので、四明山しめいざんに棲んでいる。

異材

唐の大尉たいじょう、李徳裕りとくゆうの邸へ一人の老人がたずねて来た。老人は五、六人に大木を昇かかせていて、御主人にお目通りを願うという。門番もこぼみかねて主人に取次ぐと、李公も不思議に思つて彼に面会を許した。

「わたくしの家では三代前からこの桑の木を家宝として伝えて居ります」と、老人は言った。「しかしわたくしももう老年になりました。うけたまわれれば、あなたはいろいろの珍しい物をお蒐あつめになつてゐるそうでございますから、これを献上したいと存じて持参いたしました。この木のうちには珍しい宝がございます、上手な職人に伐らせれば、必ずその宝が見いだされます。洛邑らくゆう

にその職人が居りますが、その年頃を測ると余ほどの老人になつて居りまして、あるいはもうこの世にいないかも知れません。それでも子孫のうちには、その道を伝えられている者があるうと思ひます。いずれにしても、洛に住む職人でなければ、これを伐ることは出来ません」

李公は受取つて、その老人を帰した。それから洛中をたずねさせると、かの職人は果たして死んだあとであつた。その子が召されて来て、暫くその木材を睨にらんでいたが、やがてよろしゅうございまして引き受けた。

「これはしずかに伐らなければなりません」

その言う通りに切り開いて、二面の琵琶めんの胴を作らせたが、そ

の面おもてには自然に白い鴿はとがあらわれていて、羽から足の爪に至るまで、巨細こさいことごとく備わっているのも不思議であつた。ただ、職人が少しの手あやまちで、厚さ幾分のむらが出来たために、一羽の鴿はその翼つばさを欠いたので、李公はその完全なものを宮中に献じ、他の一面を自分の手もとにとどめて置いた。それは今も伝わつて民間にある。

異肉

洪州こうしゅうの北ぎかいの大王埠たいおうふに胡こという家があつた。家はもと貧しかつたが、五人の子のうちで末子ぼっしは姿も心もすぐれていて、

この子が生まれてからは、その家がだんだんに都合がよくなって、百姓仕事も繁栄にむかい、家計もいよいよ豊かになったので、近所の者も不思議がつていた。

ある時、その家では末子に言いつけて、舟にたくさんの麦を積み込み、流れにさかのぼつて州の市いちへ送らせると、その途中の河岸けわに険しい所があつて、牽ひき舟は容易に通じない。よんどころなく江を突つ切つて進んでゆくと、やがて岸に着いた時に、船の勢いを止めるにも止められず、あわやという間に突き当つて、洲はくだけ、岸はくずれた。

その崩れた穴から数百万の銭ぜにが発見されたので、麦などはもうどうでもいい。麦はみな投げ捨てて、その銭を積んで帰った。

それによつて、その家はますます富み、奉公人や馬などを持つて、衣服も着飾るようになった。

「この子には福がある。長く村落に蟄ちっしているよりも、城中の町に往復させて、世間のことを見習わせるがよからう」

そこで、その末子が出てゆくと、途中で乗っている馬が進まなくなつた。馬は地面を踏んだままで動かないのである。彼は僕しもべを見かえつて言つた。

「いつかは船の行き着いた所で錢を得たから、今度も馬の踏みとどまつた所に、なにか掘出し物があるかも知れない」

地を掘ると、果たして金五百両を得たので、自分の家へ持つて歸つた。

その後には彼は城中の町へゆくと、胡人こじんの商人に逢った。商人はその頭に珠たまのあることを知って、人をもつて彼を誘い出させた。そうして、たがいに打ち解けた隙をみて、彼は酒をすすめ、その酔っている間に珠を奪い去った。その末子のひたいには、生まれた時から一つの毬まりを割つたような肉が突起していたのであるが、珠を失うと共に、その肉は落ちてしまった。

家へ帰ると、その変つた顔を見て、家族や友達も皆おどろいた。その以来、彼は精神朦朧もうろうのていで、やがて煩い付いて死んだ。その家計もまた次第におとろえた。

これと同様の話がある。

宣州せんの節使趙ちよう鏗こうもまた額の上に一塊の肉が突起しているの

で、珠があるのではないかと疑われていた。やがて淮南軍わいなんぐんのためめに郡県を攻略され、趙も乱兵のために殺された。その時、ある兵卒が趙の首をさがし求めて、そのひたいを割いてみると果たして珠を得た。

兵卒はその珠を持ち去って、胡人の商人に売ろうとすると、商人は言った。

「この珠はもう死んでいるから、役に立たない」

そこで、塑像そぞうを作る人に安く売って、仏像のひたいの珠に用いるのほかはなかった。

異姓

永平^{えいへい}初年^{しうねん}のことである。姓^{せい}は王^{おう}、名^なは恵進^{けいしん}という僧^{そう}があつた。

彼は福感^{ふくかん}寺^じに住んでいたが、ある朝、わが寺^じを出て資福^{しふく}院^{いん}という寺^じをたずねると、その門前^{もんぜん}に一人の大男^{だいなん}が突つ立つていた。

男^{おとこ}はからだの大きいばかりでなく、その全身^{ぜんしん}の色^{いろ}が藍^{あい}のようであつたが、恵進^{けいしん}を見て突然^{とつぜん}に追^おい迫^せつて来たので、僧^{そう}は恐^{おそ}れて逃げまわつた。竹簀^{ちくさく}橋^{きょう}まで逃^にげて来^きて、そこらの民家^{みや}へ駈^かけ込^こむと、男^{おとこ}もつづいて追^おい込^こんで、僧^{そう}を捉^とえて無理^{むり}無^む体^{たい}に引^ひき摺^ずつて行^いこうとして、どうしても放^{はな}さなかつた。

僧^{そう}は悲鳴^{ひめい}をあげて救^{すく}いを祈^{いの}ると、その男^{おとこ}は訊^きいた。

「おまえの姓はなんというのだ」

「王といいます」

「王か。名は同じだが、姓が違っている」

言い捨てて男は立ち去った。しかも僧は顫えがやまらなないので、暫くその民家に休ませてもらって、ようよう気が鎮まったのちに我が寺へ帰ると、彼と同名異姓の僧がその晩に死んだ。

異亀

唐の玄宗帝の時に、ある方士が一頭の小さい亀を献上した。亀はさしわたし一寸ぐらいで、金色の可愛らしい物であった。

「この亀は神のごとくで、物なども食いません。これを枕の筒はこのなかに入れて置けば、うわばみの毒を避けることが出来ます」と、方士は言った。

それから間もなく、帝の恩寵をこうむっている宦者かんじゃが何か親族の罪に連坐れんざして、遠い南の国へ流しやられることになった。帝は不憫に思ったが、法を枉まげて彼を免ゆるすことを好まないのです、ひそかにその亀を彼にあたえた。

「南方の僻地へきちには大蛇が多い。常にこの亀をそばに置いて、害を防げ」

宦者はありがたく頂戴して出た。そうして、南へくだる途中、象郡のある村に着いた。町も旅館もひっそりしていて、宿には他

の泊まり客もなく、自分の食膳も馬のまぐさも部屋のともしびもみな不自由なしに整えられた。

その夜は昼のような明月であつたが、しかも雨風の声が遠くきこえた。その声がだんだんに近づいて来るので、宦者はここぞと思つて、かの亀を取り出して階上に置くと、やや暫くして亀は首を伸ばして一道の気を吐いた。その気はかんむりの紐ぐらいの太さで、まっすぐに三、四尺ほどもあがつて徐々に消え失せた。その後は亀も常のごとくに遊んでいて、先にきこえた風雨の声もやんだ。

夜が明けると、駅の役人らもおいおいに出て来て、庭前に拝礼した。

「昨日あなたがお出でになるのを知つて、打ち揃つてお迎いに出る途中、あやまつて一匹の蛇を殺しました。それは報冤ほうえんだ蛇で、今夜きつとその祟りを受けるに相違ないので、あたりの者はみな三十里五十里の遠方へ立ち退いて、その毒気を避けましたが、わたくしどもは遠方まで立ち去らず、近所の山の岩窟にかくれて夜の明けるのを待つて居りました。唯今これへ来て見れば、あなたはつつがなく一夜をおすごしなされた御様子、これは神の助けと申すもので、人間の力では及ばない事でございます」

そのうちに往来の人もだんだんに来た。その話によると、これからさきの道にあたつて、十数頭のうわばみが総身くずれただれで死んでいたという。その以来、ここらに報冤蛇の跡を絶つたが、

その子細しさいは誰にも判らなかつた。

一年の後、宦者は赦されて長安の都に歸つた。彼は金の亀を返上して、泣いて感謝した。

「このお蔭に因りまして、わたくし一人の命ばかりでなく、南方ぜんたいの人間が永く毒類の禍いを逃がれることになりましたのは、一に聖徳、二に神亀の力でございます」

異洞

乾符けんぷ年中の事、天台の僧が台山たいざんの東、臨海りんかい県のさかいに一つの洞穴ほらあなを発見したので、同志の僧と二人連れで、その奥を探

りにはいった。初めの二十里ほどは路が低く狭く、ぬかるみのよ
うな所が多かったが、それからさきは次第に闊ひろく平らかな路にな
って、さらに山路にさしかかった。

山は十里ほどで、それを越えると町へ出た。町のすがたも住む
人びとも、世間普通と変ることはなかった。この僧は気を吸うこ
とを習っていたので、別に飢えも渴かわきも感じなかったが、連れの
僧はひどく飢えて来た。

そこである食い物店へ行つて食を乞うと、そこにいる人が言っ
た。

「飢渴きかつを忍んで行けば、子細なく還られるが、ここの土地の物を
むやみに食うと、還られなくなるかも知れませぬぞ」

それでも余りに飢えているので、その僧は無理に頼んで何か食わせてもらった。

それからまた連れ立って行くこと十数里、路がだんだんに狭くなって、やがて一つの小さい洞穴を見つけたので、それをくぐって出ようとすると、さきに物を食った僧は立ちながら石に化してしまつた。

ひとりの僧は無事に山を出て、ここはどこだと人に訊くと、^{うへい}平の海浜であるといわれた。

異石

帝堯ぎようの時に、五つの星が天から落ちた。その一つは土の精で、穀こくじよう城山下に墜ち、化して※橋ひきようの老人となつて兵書を張良ちようりように授けた。

「この書をよめば帝王の師となることが出来る。後日にわたしを探し求めるならば、穀城山下の黄いろい石がそれである」

いわゆる黄石公こうせきこうである。張良は漢をたすけて功成るの後、穀城山下に於いて果たして黄石を発見した。彼は商山しようざんにかくれていた四皓しこうにしたがい、道を学んで世を終つたので、その家では衣冠と黄石とを併せて葬つた。占う者は常にその墓の上に、黄いろい気が数丈の高さにのぼっているのを見た。

漢の末に赤眉せきびの賊が起つた時に、賊兵は張良の墓をあばいたが、

その死骸は発見されなかつた。黄いろい石も行くえが知れなかつた。墓の上にあがる黄氣もおのずから消え失せた。

異魚

こういぎよ
 鯪魚は河豚ふぐの一種で、虎斑がある。わが虎鰻とらふぐのたぐいで

あつて、なま煮えを食えば必ず死ぬと伝えられている。

じょう
 饒州じょうごに呉ごという男があつた。家は豊かで、その妻の実家も富ん

でいて、夫婦の仲もむつまじく、なんの欠けたところもなかつた。

ところが、ある日のこと、呉が酔つて来て、床の上につつ倒れてしまった。妻が立ち寄つて、その着物を着換えさせ、履くつを脱がせ

ようとして其の足を挙げさせる時、酔っている夫は足をぶらぶらさせて、思わず妻の胸を蹴ると、彼女はそのままたお仆れて死んだ。

夫は酔っていて、なんにも知らないのであった。

しかし妻の里さと方かたでは承知しない。呉が妻を殴うち殺したといって告訴に及んだが、この訴訟事件は年を経ても解決せず、州郡の役人らにも処決することが出来ないので、遂に上じょう聞ぶんに達することになって、呉を牢獄につないで朝廷の沙汰を待っていた。

呉の親族らはそれを聞いて懼おそれた。上聞に達する上は必ず公然の処刑を受けるに相違ない。そうなつては一族全体の恥辱であるというので、差し入れの食物のうちにかのなます鯁魚なますの生き鱈なますを入れなますて送った。呉がそれを食って獄中で自滅するように計ったのであ

る。しかも呉はそれを食つても平氣であつた。親族らはしばしばこの手を用いたが、遂に彼を斃たおすことが出来なかつたのみか、却つてますます元氣を増したように見えた。

そのうちにあたかも大赦たいしやに逢つて、呉は赦されて家に歸つた。その後も子孫繁昌して、彼は八十歳までも長命して天寿をまつとうした。この魚はなま煎にえを食つてさえも死ぬというのに、生なまのままではしば食つても遂に害がなかつたのは、やはり一種の天命というのであろうか。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

※「※」#「土+口」、159-2] 橋《ひきょう》の老人」には、

「※」#「土+巳」、第3水準1-15-36] 橋《ひきょう》の老人」

の誤りを疑いましたが、初出の「支那怪奇小説集」サイレン社、1935（昭和10）年11月24日発行でも異同がなかったので、底本通りとしました。

入力・tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

録異記

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>